

森 重敏先生を偲んで

森 重敏先生の訃報に接し謹んで哀悼の意を表するとともにご冥福をお祈り申し上げます。

先生のご経歴は、「教育と研究の歩み50年を省みて」(『創大教育研究』創価大学教育学会1993 pp.15-30)に詳しく述べられています。ここでは、個人的なエピソードから始めたいと思います。

1977(昭和52)年の4月、森先生は開設間もない創価大学教育学部の非常勤講師に就任されました。私は、同学部児童教育学科の2年次に在籍していました。「保育内容の研究(自然)」の最初の授業で、先生は、柔和な笑顔で、そしてわかりやすい言葉で、幼児教育の大切さや心理学研究の意義を懇切に熱意を込めて講義してくださいました。その中には、先生の代用教員時代の話も含まれていて、当時教員をめざしていた私たちには特に身近なものとして感じられました。



学部内のささやかな新聞作りの活動をしていた私は、授業終了後、失礼を顧みず先生に原稿の依頼をしていました。小さなエッセイのようなものをお願いしたつもりだったのですが、後日先生からいただいたのは、400字詰め原稿用紙16枚に及ぶ立派な原稿でした。当時はまだガリ版刷り、しかも1枚刷りの紙面、学部内の者にしか配布しない新聞にはもったいない限りです。高名な先生に立派な原稿をいただき、何とかそれにふさわしい形にしないと、活字印刷の小冊子を作ることに。アルバイトで費用を稼ぎ、先生直筆の題字をいただき、イラストの得意な友人の挿絵入りで、ささやかながら厚紙のカバー付きの小冊子「児童教育と私」が完成しました。

先生は、年齢を感じさせない健康の秘訣として腕立て伏せや逆立ちを毎日続けておられ、何十回とできることなどうかがい、また見せていただいた記憶もあります。年齢を感じさせないお元氣な先生は、学生たちから幼児教育の権威として尊敬されるとともに、雰囲気や映画評論の故・淀川長治さんに似ていると大いに敬愛されておりました。そしてさらに数年の時間が流れ、退職される際に開かれた宴会の席でのことでした。挨拶に立たれた先生は、その時点で20年近く前に差し上げた「児童教育と私」の小冊子を背広の胸ポケットから取り出され、その思い出を語ってくださったのでした。末席の私は、自分にスポットライトが当たったような気恥ずかしさと何か温かいものに包まれたような気持ちでした。

先生を実行委員長として、1988年10月に応用心理学会第55会大会を開催しました。先生は、広告取りなどの渉外を精力的に推進しておられました。某企業の若い社員に、その企業との付き合いがいかにか長く深いものかを諄々と論ざれていた先生の姿が思い出されます。余った弁当の件では先生ともども苦勞しました。

先生は、卒寿の前後も研究意欲旺盛であられ、『ギフトッド・チャイルド—その育て方と伸ばし方—』(P.ウィットティ編著、森 重敏訳、家政教育社、2008年)をいただき唯々感服するばかりでした。早速お礼の手紙を差し上げたのも束の間、書評のようなものを書けないかとの手紙が届きました。どこにどんな形で、などと考えあぐねたものの形にすることができませんでした。そこで簡単ではありますが、この紙面をお借りして述べさせていただきます。

多重知能理論など知能の質的な面(いわば知の個性)に注目が集まる動向とも関連し、近年、才能(giftedness)、才能教育(gifted education)といった考え方が提起されています(岩永雅也・松村暢隆編、2010、『才能

と知能』, 放送大学教育振興会など)。そこでは, すべての子どもに才能があることを認め, すべての子どもの比較的得意な能力, 学習への興味, 学習スタイルといった認知的な特性を把握してそれに適合させた, つまり個性化された学習・発達がめざされています(発達障害の子どもの才能や自尊感情に着目した教育も提唱されているようです)。

先生のお考えも同じだったのではないのでしょうか。先生が研究されていた優秀児の意味は, 決して特定の知的に優秀な子どもというだけの意味ではなく, 多様な子どもたちがそれぞれに有している優秀性(excellence)を見だし育てていくことを望んでおられたのではないかと拝察いたします。

先生が半世紀を超える時間とその間の困難を乗り越えてまとめられた本書は, その「あとがき」で先生が仰っておられるように, 「古くて新しい」研究書です。子どもの発達として, また教育として, めざすべきexcellenceとその方途を考えるための基本文献として広く読まれることを願ってやみません。

(創価大学教職大学院 吉川成司)